

『ここ』から行動を始めるために ——ソーシャルキャピタルを生かして 『負の遺産』を乗り切る

2008.07.25 (金) 開講

【講師プロフィール】



吉本哲郎

(よしもとてつろう)

地元学ネットワーク主宰、水俣病資料館企画アドバイザー

水俣市役所都市計画課、企画課、環境対策課、水俣病資料館を経て、2008年3月退職。水俣再生に向け、水、ごみ、食べ物に気をつける住民協働の環境モデル都市づくりに参画。対立を「環境都市水俣」をつくるエネルギーに変えていくことを提唱。地元のことを外の目を借りながら、自ら調べ考え、生活文化を創造する「地元学」を提唱し、国内外で実践している。著書に『私の地元学 - 水俣からの発信』など。

水俣市は、熊本県の最南端、鹿児島県との県境にあります。162.87 km²の土地に、1万1000世帯、約2万9000人が暮らしています。「環境都市水俣」を目指した取り組みに力を入れており、2004年と2005年には、2年連続で「環境首都コンテスト」で総合1位になりました。その取り組みを見ようと、今では日本国内だけでなく海外からも人が来るようになりました。でも、ほんの10数年前まではこうではなかったのです。

●胸を張って水俣出身と言える地域づくりを

52年前の1956年、次々にやってくるこれまでにない症状を持つ患者を診察し、現地を調べた細川一院長は5月1日、水俣保健所に届け出ました。水俣病の公式発見の日です。水俣病とは体内に入った強い毒性を持つメチル水銀が、主に脳など神経系を侵す有機水銀中毒です。水俣市にあるチッソ工場から水俣湾にメチル水銀混じりの排水が流され、生態系の中で濃縮され、メチル水銀に汚染された魚介類だと知らずに食べたことで発病しました。水俣病事件は、多くの人の命を奪い健康を損なっただけでなく、患者とそうでない人を分断し、地域社会を破壊することとなりました。

公式に発見されてから12年後の1968年、国はようやく、水俣病患者をチッソが流したメチル水銀混じりの排水が原因の公害病であると、公式に認定しました。それから、原因企業による救済が行われることになりました。現在の認定患者は2268人です。でも、長い間多くの人たちが救済されず、発生から40年後の1995年になって、裁判をやめることを条件に1万人を超える人たちが政治解決で救われることになりました。大阪で裁判を続けた人たちに2004年、最高裁の判決が出ました。水俣病の拡大を防止しなかったことに対して、国と県には責任があるとする判決が出たのです。以降、新たに水俣病の申請をする人が5000人を超え、新たに裁判を起こす人も1500人を超えるなど、今なお救済を求めている人たちが大勢います。水俣病事件はもはや合理的な解決は困難な状況に至っています。

患者たちが健康を害し、命までも奪われただけでなく、水俣市民も水俣出身ということが分かると結婚の話が壊れたり、就職がダメになったりしました。大阪で働いていたある女性は、水俣出身だということで仕事を3回も辞めることになったと聞きました。ある若者がバイクで水俣を通りぬけようとして、スピード違反で捕まりました。若者は、感染するのがいやだったから、息を止めて猛スピードで駆け抜けようとしたそうです。30年ほど前、水俣病への差別と偏見がひどかったころの話です。それだけでなく、水俣という名前のついた農産物は売れなくなりました。観光客も寄り付かなくなり、ホテルや旅館では閑古鳥が鳴きました。地域住民の心もすさみ、怪文書が出回ったり、嫌がらせの電話がかかってきたり、悪口を言い合うのが当たり前になっていきました。人間のあらゆる面がすべて出てしまうような、非常にいやな町になっていきました。

●問題の解決・共存は問題づくりから

水俣市役所に勤務していた私は、「こんな所におられるか」と辞表を書いていました。ところが1991年になり、熊本県が水俣病問題の解決・共存と、水俣の再生に乗り出す

ことになりました。私は企画課に配属になり、自分に「逃げるな、正面から向き合え」と言い聞かせてその取り組みに参加していきました。

解決のためには「問題」をつくることから始めようと思いました。私たちは、「答え」ではなく「問題」を間違えていると思ったからです。私の母親は「患者がテレビや新聞で騒ぐから農産物が売れない」と言っていました。その答えは「患者は騒ぐな」です。答えは合っています。問題を間違えています。問題がどんな姿・形をしているのか県と一緒に調べていきました。

また、水俣の再生は環境から始めようとずっと前から思っていました。みんなもそうでした。公害都市の再生は環境再生からだと思っていたのです。

水俣の人たちは、ここに生まれた以上、ここで生きていくしかありません。胸を張って水俣出身といえる地域をつくるしかないのです。そうした思いで取り組み始めたのです。

●水俣病問題の大まかな姿・形

水俣病問題の解決と共存に向け、次のような問題を立てました。1つ目は「生きていくうちに助けてくれ」という被害者を救済することです。しかしながら、被害者を助ける前に、お金を持っていない加害者を助けねばならないという矛盾が生じました。これが2つ目の問題です。加害企業を先に助けないと、倒産してしまうかもしれない。するとPPPという、汚染の原因者による負担という原則による患者救済はできないのです。救済とは結局お金なのです。

患者たちは家に帰れば生活が待っていました。そこにいくつかの大きな問題がありました。「失った健康と生命は元に戻らない」という問題です。慰霊、癒し、祈りを始めていくこととなりました。次に「私たちも役に立ちたい」という患者たちがいました。50歳を超えた胎児性患者たちの言葉です。生きがい、働きがいなど、いわゆる地域福祉の領域についても考えなければならぬ。でも、存在理由の確認の問題がありました。水俣病の体になってこの世に生まれてきた。そこにどんな存在理由があるのか、いくら考えても分からない。答えられない問題があることに気づきました。すると水俣に住む者には、解決できない問題と共存するという覚悟があるということが分かってきました。

次に、「水俣出身とは言えない」という問題です。水俣から外に出て働いている人たちは、水俣出身とは言わずにいました。楽しいはずの修学旅行で、「布団を消毒しないといけないかねえ」と旅館の人たちから言われたりして、泣いて帰ってくる子どもたちがいました。また結婚や就職などに大きく影響しました。水俣の人たちは、水俣出身ということをはたすら隠し続けてきたのです。

ある患者が言いました。「このままでは俺たちの犠牲は無駄だ。犬死にだ」と。私は思いました。あなたたちの犠牲は決して無駄にはしません、と。でも言葉になって出てきませんでした。目的だけでなく、どのように誰がするかを言えないと、無責任になると思ったからです。

みんなで作ってきたことを振り返ってみて、分かったことがありました。それは、「水とごみと食べ物に、世界のどこよりも気をつける」ことでした。チッソという水俣病の原因企業が有機水銀というごみを流し、水（海）を汚染し、魚に濃縮されて知らず知らずの間に人の体に入っていました。だから、膨大な水俣病の犠牲を無駄にしないためには、水俣の人にとって、「水とごみと食べ物に、世界のどこよりも気をつける」ことだったのです。

●地元で学び、町や村の元気をつくる「地元学」

水俣再生を環境から始めたと言いました。環境とは何だろうと調べて考えていきました。驚いたことがありました。農業を営む私の母親の言葉を考えてみたら、「環境」という言葉を使っていなかったのです。母は環境ではなくて、「明日晴れるかな」「霜は降りるかな」「桜が咲いた」など具体的なことを言っていました。決して「環境問題」などとは口にしていませんでした。生活現場にいる人たちの多くは、「環境」という言葉を使っていなかったのです。使っていたのは私でした。そしてジャーナリストでした。また、NGO/NPO、学者などの専門家たちでした。環境という言葉は、生活の当事者ではない人間が使う言葉でした。

おそらく母は言うでしょう。「地球環境なんて、見たことも食ったこともない」と。私は思います。私の家と集落が私の地球だと思って行動していけばいいと。水俣も、ここが私の地球だと思って行動していけばいいと思うのです。

●愚痴を自治に変える——「ないものねだり」から「あるもの探し」へ

そこで、1999年に役場でISO14001を取得したり、水源の森を守る活動を始めたり、食品トレイを減らす試みや、不買運動の反対で、環境にいい取り組みをしているお店を褒めるエコショップ認定の仕組みなど、さまざまな取り組みを通して、世界のどこよりも水、ごみ、食べ物に気をつけてきました。学校版ISOは、ごく簡易なマネジメントシステムです。今、県内すべての小中学校に広がり、その後は県外へも波及するほどの広がりを見せていきました。

こうした活動を支えたのが、1991年につくられた地域の自治的組織「寄り会」です。地区の活動を世話する世話人たちの集まりです。最初にやったことは、環境に関する話を話し合う寄り合いでした。26地区全体で、一斉に行われた寄り合いで、子ども時代に遊んだ思い出を話し合ってもらいました。次に、その場所が今はどうなっているかを話し合い、もし変わってしまっているなら、ではどうすればいいか、を話してもらいました。そのことをまとめて、全体会議を開いて共有していきました。

実は、この取り組みは「自分たちのことは、自分たちでやろう」という自治する暮らしへの仕掛けでした。「寄り会」の役員会議で私は発言しました。「役所には陳情しないで自分たちでやれることをやってくれ」と。すると猛反発がきました。でも、どうにか分かってくれて行動していきました。

あとで、分かりました。陳情するのは「ないものねだり」、愚痴なのです。その反対が「あるもの探し」です。それが、つまり自治することでした。地域でも、会社でも商店街でも、愚痴でよくなった試しがない。だから、水俣再生にあたっては、愚痴はやめよう、愚痴を自治に変える必要があると思っていました。

水俣の各地区に何があるのか、あるもの探しをしました。「地域資源マップ」づくりです。でも、ある地区の人が「うちには地域資源は何もない」というのです。私は「川に魚はいるのかい？山の幸は何かい？」と聞いて地図に書きこんでいきました。すると「そんなものでいいんだったら、いっぱいある」となって、地域資源マップがつくられていきました。この経験から、地域資源ではなくて「あるもの探し」に変えていきました。

次に、全部の地区で、みんなで水の行方を調べていきました。すると、農業用水路より低いところに田んぼがあり、その上に農家や畑、竹林、栗林などがある、という具合に、村の風景は水がつくっていることなどが分かりました。また、水源がどこにあるの

かが目に見えるようになり、住民による環境アセスメントの柱が1つできていきました。

また、ここに生きてきた人の話を丹念に丁寧聞くこと、生活を調べること、家を調べ、村を調べると、知っているはずのことも、実はよく知らなかったことが分かってきたのです。

こうした過程で、自分たちが自分たちの周りのことに詳しくなっていくのが大事だと思うのです。大学の先生などの専門家たちが、水俣病のことを調査にやって来ましたが、でも住んでいる私たちは詳しくなりません。私がやってきたことは、下手でもいいから、自分たちのことは自分たちで調べようということだったのです。私たちは素人だから調査は下手です。それでもいいから自分たちで調べよう、調べたことだけ詳しくなるのだから。

こうした調査を、海の民、野の民、山の民、町の民、みんなで取り組んだのです。地域に住んでいる者が自分たちで、足元にあるものを探し、水俣再生やものづくり、生活づくり、家族づくりなどに役立てていく、今に生かしていく。この進め方を後に「地元学」と名づけました。

◎対立のエネルギーを創造のエネルギーへ

2008年2月28日に亡くなった杉本栄子さんのことを話します。網元の一人娘でした。母親が最初に水俣病を発症しました。父親は病院に連れていきました。伝染病だと村の人たちは思っていたので、魚が売れなくなるからということで、村の人たちは患者を家の中に隠していました。しかし、杉本さんの父親は母親を病院に連れていき、しかもラジオで「杉本トシはマンガン病」と報道されてしまいましたから、それからひどいじめが始まりました。

後に帰ってきた母親は、村の中を歩くなと言われていたのですが、村の道を歩いたら、隣の人が母をがけから突き落としました。家のガラスは投石で割られました。網子から網を切られました。そんな地獄のようなひどい仕打ちを受けてきました。

父親も発病し、亡くなっていきました。父親は「栄子、網元は、木を大切に、水を大事にして、人を好きになれ。仕返しはするなぞ、俺がこらえていく。母ちゃんより先に死ぬなぞ」と言って亡くなっていきました。栄子さんは言っていました。「父親の言うことを守るのは難しかったけど、いじめた人様は変えられないから、自分が変わる」と。そうやって生きてきました。でも母親より先に亡くなっていきました。69歳でした。

私は栄子さんが、そして同じ受難を受けた夫の雄さんの考え方と行動が、水俣を変えたと思っています。杉本さん夫婦との出会いが水俣再生の第一歩だったと思っています。当時の吉井正澄水俣市長も自分が変わろうと思ひ、患者の家に飛び込んでいきました。

私は思うのです。水俣も世間にいやな目に会いました。でも、日本という世間は変えられないから、水俣が変わったのです。問われていたのは私たちだったのです。水俣だったんです。そのことを、栄子さん雄さん夫婦は地獄のような経験から教えてくれたのです。水俣が自分たちで変わるために、世間を頼りすぎずに自分たちのことは自分たちでやるために、足元にあるものを探して、組み合わせたりして新しいものをつくったり、コトを起こしたりしていく。そして町や村の元気をつくっていく。それが後に地元学と名づけた動きなのです。

●距離を近づけ、話し合い、お互いの違いを認め合う

たとえば「水俣病のある水俣は暗い、重たい」と人がいます。私は考えました。漬物だって、暗いところで重い石で長くつけるからおいしくなる。それなら水俣は、40年も重たい、暗いところにいたのだから、何かが生まれているはずだ。そうでなければ、何のための膨大な犠牲か分からない。水俣病のことを貴重な経験に、新たな価値を創造することが、今の水俣につながっているのです。

タブーだった水俣病について、対立し合う人々が距離を近づけ、話し合い、対立のエネルギーを創造のエネルギーへ転換する。そのためにお互いの違いを認め合う。そうやって、住んでいる私たちが引き受けるしかなかったのが水俣病事件と水俣再生だったのです。

●失敗を認め、二度と繰り返さない仕組みをつくり、行動すること

「水俣病事件のようなことは、二度と繰り返してはならない」という教訓があります。でも教訓の前に、反省がないとうまくいかないものです。さらに反省する前に失敗したことを認めないと反省は生まれません。でも、勇気を出して「私がしました」と失敗を認めると、マスコミなどが寄って来すぎて二度と立ち直れないほど叩いてしまう。失敗したら、二度と浮かばれないようになってしまいます。だから失敗を自ら認めない社会をつくってしまったのではないかと危惧しています。

加害企業であるチッソは今も非を認めているとは思えない。葉害エイズ事件もそうですが、水俣病のような事件は繰り返されている。決して減ってはいない。このままでは、似たような過ちが今後もきっと繰り返されることでしょう。私は同じことを二度繰り返すことを失敗だとしています。不幸にして起こした失敗といわれることも、二度と繰り返さないようにしたら失敗じゃない。一度だけの失敗にして、反省して繰り返さない仕組みをつくる必要があります。

●行動は足元からしか始まらない

あちこちで地元学の話をする、「調べてどうなるんですか?」と聞かれることがある。「どうなるか?」ではなく、「どうするか?」だと自ら思うことだと思っています。未来は意志がつくるもの。「どうなるかなあ」では、今日と同じ明日しかやって来ない。結局は、自分たちのことは自分でやる自治が問われているのです。

あるもの探しをして、水俣づくりやものづくり、生活づくりに役立ててきたという話をしました。湯布院で「木工アトリエとき」を主宰する時松辰夫さんは、いい町を「自然と生産と暮らしが繋がっていて、常に新しいものをつくる力を持っている町だ」と言います。新しいものをつくっていないところは衰退するというのです。では新しいものとは何でしょうか、私は、何も無いところから新しいものは生まれません。実は、新しいものとは、「あるもの」と「あるもの」の新しい組み合わせだと考えています。

地球環境のような大きな問題を考えたとしても、行動はここからしか始まりません。自分の足元の「ここ」にあるものを探すことからしか始められないものです。あるものを探すのは誰でもできます。ただし、組み合わせるのは意外と難しいのです。自由に発想するやわらかい感性を必要としています。ある料理人が私に教えてくれました。「冷蔵庫の扉を開けて、あれがない、これがないと言って料理するのは二流の料理人だ。あるものでやるのが一流の料理人だ」と。私は、それを黙ってやる普通の人が超一流だと思っています。

地域の扉を開けて、ないものねだりではなく、あるものを探し、ここから行動することです。また必死になってやってみることです。

地域づくりは問題解決型から価値創造型に変わってきています。会社、社会、生活など、あらゆる場面で、創造的であることが問われています。皆さんには、困った問題を創造的に解決する「社会起業家」になってもらいたい、それが希望のもてる21世紀のこれからを、新たに開拓していくことになると思います。

◆ 私が考える「サステナブルな社会」

元気な地域をつくるには、人、自然、経済という3つの元気が必要です。ここでいう経済には3つあるとしています。それは、貨幣経済だけではなく、「結い」のような共同する経済、そして自給自足を基本とした私的経済のことです。地域に何がなく、ではなく、あるものを探して組み合わせる新しい価値を創造していく地域づくりが今問われています。

◆ 次世代へのメッセージ

地域を調べてどうなるか？ではなく、どうするか？を考えてもらいたい。そうであれば、今日と同じ明日しかやって来ません。未来は自分たちの意志でつくられるからです。本当に大切なことは、与えられた問題を猛スピードで解くことではなく、どんな問題として解けばいいのかという問題づくりです。そして、社会の困った問題を創造的に解決する社会起業家になってください。

◆ 受講生の講義レポートから

「何よりも印象的だったのは『自治』という言葉です。人間はすぐ人のせいにしてしましますが、今起きている問題は自分の問題で、まず自分で解決しようとする、その力が人をイキイキとさせるのだと思います」

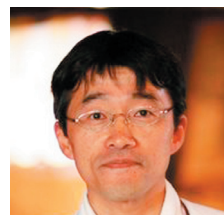
「地元学の、足元を調べることが始めること、あるものを認識して生かしていくという考え方が、大学で学んだ『バンブー手法』という途上国援助の手法に似ているなと思いました。今まで援助という視点で考えていたことが、日本の地域や私たちの暮らしに直結するものだと気づきました」

「恥ずかしながら、私の中にも先入観がありました。水俣の海にサンゴがいると聞いて『まさか！』と驚きました。環境、エコといった言葉を毎日目にしますが、『知っている、分かっている』けれども『何もしていない』のが現状だと痛感しました」

半農半Xがひろく 地域と人の豊かな関係

2008.08.27 (水) 開講

【講師プロフィール】



塩見直紀

(しおみ なおき)

半農半X研究所代表

カタログ通販会社を経て、2000年4月「半農半X研究所」を設立。21世紀の生き方、暮らし方として、「半農半X (=天職)」というコンセプトを提唱している。「半農半Xデザインスクール」などを通して、市町村から個人までの「エックス=天職」を応援するミッションサポートとコンセプトメイクがライフワーク。著書に『半農半Xの種を播く』など。京都府綾部市在住。

環境問題と、「自分の天職は何か、自分は何のために生まれてきたのか」(天職問題と命名)という2つが、僕は「21世紀の二大問題」だと思っている。この2つを解決できるような生き方を模索する中、故郷である京都府綾部市で、「半農半X」という生き方、暮らし方を実践・提唱している。半農半Xとは、持続可能な「小さな農」と「天与の才(X)」を生かして、社会の問題を解決していこうというコンセプトだ。

●農業をしながら大好きなことを仕事に

半農半Xというコンセプトが僕の中に生まれたのは、30歳、1995年の阪神大震災のころだ。元々は、屋久島在住(当時)の星川淳さんという作家・翻訳家の方が、農業をしながら著述業を営むライフスタイルを「半農半著」と言っていたことにヒントを得ている。その生き方に出会った20代の後半、「これこそがこれからの生き方だ」と確信した。当時は、自分は何もできないし、大好きなこともないし、特技があるわけではない、と思っていたので、Xが何かは分からない。それでも、半農半X的な方向で間違いないだろうという気持ちが自分の中にはあった。

このコンセプトは、最初は知人に話すくらいで注目されることはなかったが、2000年にホームページを立ち上げたところから、時代が変わったのか、メディアに取り上げられるようになってきた。環境問題に対する危機感が迫ってきたことと、特に30歳前後の人は生き方に迷っているという背景があったと思う。会社に勤めて数年経ち、「これからどうしようか、自分が描いていた夢は何だったのか」、そういうことを再考する人がたくさんいるのかなと思っている。

●半農半Xの8つのキーワード

半農半Xが重視する8つのキーワードを紹介しよう。

情報発信 (ジャーナリスト、出力、シェア)	天職、ミッション、役割 (自己定義、貢献の舞台)	手仕事、アート (アーティスト、表現)
瞑想、散歩、思索 (アイデア、インスピレーション)	半農半X	小さな農、採集 (身体性、汗)
コミュニティ、地元 (終の住処、修行の舞台)	地球環境、持続可能性 (エコロジスト、感性、生命性)	家族 (だんらん、人間関係)

下段の3つは場所、根っこを表すものだ。まず「地球環境・持続可能性」。例えば、江戸時代は幕藩体制で、自分の藩のことだけ考えていればよかった。黒船来航で、外国人の視点が入ると、日本という単位で考えるようになり、アポロの時代になると、初め

て地球から飛び出して外から地球を顧みた。今の私たちは、昔の人とは確実に意識が違って、地球環境という見方が大切だ。

一方で、「コミュニティ」や「地元」という視点も欠かせない。場所というのはとても大事で、「場所が見つければミッションが見つかる」という人もある。マザー・テレサを慕ってインドに渡った日本人が、「日本でやるのがもっとあるはず」と追い返されたという伝説的な話もある。自分の活動の舞台、表現の舞台がどこなのかは、とても大事なことだ。

もう1つの場所が「家族」だ。家族とはいわば登山における「ベースキャンプ」ではないかと思う。つまり、それぞれがそれぞれの山頂に向かう途中で、休息し、ミッションを果たすために英気を養う場所だ。お互いの人生の目標である山頂に登るための知恵を分かち合ったり、ときには癒しを与え合う場所ではないかなと思う。

この3つがベース、根っことしてあって、その上にあるのが心身のことだ。僕は小学5年生の娘と一緒に、夜9時に寝て、毎日、朝3時に起きている。家族が起きてくるまでの3時間を、新しいコンセプトを考えたり、エッセイを書いたり、本を読んだり、思索の時間にしている。皆さんが将来、結婚して子育てに追われるようになって、早起きしてでも、自分一人と向き合う静かな時間をつくってもらえたらと思う。

僕は畑や田んぼに出るときは必ずメモ帳を持っていく。そこでもらったインスピレーションをメモして持ち帰り、企画を立てたり、原稿などエックスに活かすためだ。田んぼでなくても、瞑想とか思索とか散歩とか、心にとってはとても大事な時間なのかなと思う。

もう1つ大事なのが身体のみだ。今、自分の身体が自分ではないと感じる人がとても多い。身体性を取り戻すのがとても大事なキーワードだ。若い女性を中心にヨガなどが広がっているが、これも身体性を取り戻そうという動きだろう。

僕は、例えば田んぼに入るときは、長靴などは履かずに素足で入ることにしている。素足で入ったほうが、インスピレーションをもらいやすい状態、天地とつながった状態になる。足への刺激が脳に思いがけないアイデアという贈り物をもたらす。また感性豊かに、敏感にもなれる。

この身体性と心の面の2つはとても大事なキーワードで、半農半Xというスタイルを実践することによって、これを取り戻すことができる。この2つが充実することで、地域（人や自然など）との豊かな関係を築くことができるような気がしている。

この心身の上にもたらされるのが「表現」の部分、詳しくあげると、「手仕事、アート」「天職」「情報発信」の3つだ。アートというのは、何もアーティストだけがするものではなく、人は本来みんなアーティストだと思う。綾部の村人の中にも、晴れた日は農業、雨の日は仏像を彫っている、といった暮らしぶりのおじいちゃんがいる。よく探せば周りにもすごい里山アーティストがたくさんいる。

それから「天職」。「ライフワーク」と呼んでもいいし、「役割」「ミッション」「天命」でも何でもいいが、何のために私たちは生まれてきたのかという意味、訳を見つけること、気づくことはとても大事なことだ。見つからなかったら不幸になるというものではないが、これを見つけた人は幸せだろう。

最後の「情報発信」は、特に若い世代に取り組んでほしい。情報を発信することで解決していく問題がたくさんあると思うからだ。大学生と話すと、環境問題でどんな新しいことがあるのか、何が今語られているのか、本当によく知っている。ただし、それを人に伝えているかということ、意外と発信していない人が多くて、それではもったいな

い。情報発信している人は2割で、8割の人は受信中心だという。僕たちのなかには発信可能なことが眠っている。長く半農半Xを考えてきたが、情報発信が大事だということがよく分かってきた。僕もはじめは、地元の人にとって理解しにくい面があったと思うが、自分で発信して、新聞などで取り上げてもらうことで、「あなたの目指している社会、未来はそういうことなのか、よく分かりました」と言ってくれる村人がとても増えた。

自給率という言葉は、食糧やエネルギーに使われることが多いが、「メディアの自給」もとても大事なことだと思う。地域の情報発信をしていくこと、一人ひとりが持っている「X」を引き出していくためにも、もっと情報発信をしてほしい。豊かに表現すると地域も豊かになる。

●天職の見つけ方

半農半Xの「X」とは、天職、つまり天が与えた仕事という意味だが、若い世代からこれが分からないという相談を受ける機会がよくある。「どうしたら大好きなことが分かるんですか?」「Xのヒントはどうしたら見つかりますか?」と聞かれるのだが、1つヒントとして言えるとしたら、長く続けてきたこと、お金や時間をかけてきたこと、なぜだか気になって何度も思い返すことを振り返ってみてはどうだろう。子どものころに大好きだったことがヒントになるかもしれないし、今やっている仕事やアルバイトとか、趣味にもヒントがあるかもしれない。

農の部分については、「どのぐらいの規模でやるのがいいのか?」と思うかもしれないが、面積は関係ないと僕は考えている。大規模にやってもいいし、市民農園や家庭菜園、屋上菜園でもベランダ菜園でもいい。時間配分についても、「半農だから1日4時間」と厳密に考える必要はなく、例えば週末だけでも月1日でも構わない。時間や面積には関係なく、少しでも植物に触れていく生き方、暮らし方を取り戻すことがとても大切だ。

皆さんもご存じの『沈黙の春』を書かれたレイチェル・カーソンさんという人は、今から40年ほど前に「センス・オブ・ワンダー」という言葉を残している。これは「神秘さや不思議さに目を見はる感性」を表す言葉だが、半農を別の言葉で表すとしたら、この「センス・オブ・ワンダー」という言葉が近いかもしれない。

●今すぐアクションを

2003年に最初の本『半農半Xという生き方』を出したが、特に20～30代の若い世代が読んでいてくれるようでうれしく思っている。若い世代に半農半Xという考え方を何とか伝えていくのが僕のミッションだと思う。なぜかと言うと、もしも皆さんが、「定年退職後から人生を楽しもう」と思っていたとしたら、それでは遅すぎる。そのころの東京は沖縄ぐらいの気候になっている可能性もあり、何がどうなっているか分からない。それぐらい、環境の大きな変化を肌で感じている。

若い世代に一番言いたいのは、できるだけ早く、5年以内ぐらいにアクションを起こしてほしいということだ。そのほうが、10年後のアクションより、いい結果が出るだろうと思う。

例えば、今の農家の方の中心的な担い手は、70歳とか75歳ぐらいと、かなり高齢化している。このままでは、日本の農業はあと5年ぐらいしか持たないだろう。5年以内にアクションを起こしてほしいというのは、そういう意味でもある。皆さんのおじい

さん、おばあちゃんや親戚が、農的な暮らしをされているなら、今のうちに知恵を授かってほしい。

これから環境問題が深刻化する大変な時代を生きるためには、少しでも自給していく必要がある。国に向かって「食料自給率をもっと上げよう」と言うよりも、まずは自分で1粒の種をまいてみる、田んぼに入ってみる、畑に行ってみる。それがとても大事なことはないかと思っている。



(ソニー・マガジズ刊、2003年)

◆ 私が考える「サステナブルな社会」

一人ひとりが天の意に沿う持続可能な小さな暮らしをベースに、天与の才を世のために生かし、社会的使命を实践し、発信し、全うしていく生き方。そうした半農半Xという生き方が、天の才を発揮し合う、持続可能な社会をもたらすのだと思っています。

◆ 次世代へのメッセージ

若い世代に一番言いたいのは、できるだけ早く、5年以内ぐらいにアクションを起こしてほしいということです。例えば、今の農家はかなり高齢化していて、このままでは、日本の農業はあと5年ぐらいしか持たないだろう。皆さんのおじいちゃん、おばあちゃんや親戚が、農的な暮らしをされているなら、今のうちに知恵を授かってほしい。

◆ 受講生の講義レポートから

「食糧自給率だけでなく、『心の自給率』を上げるには『センス』や『インスピレーション』も高めなくてはと思います。そのためには、森の中に入ったり、いろいろな詩集を読んでみようかなと思います」

「まるで自分がアンテナを張っていない知恵・生き方を知りました。これって視野が『パーッ』と広がることかと、ホクホクした気分になりました」

「講義前は『環境のために〇〇せねばならない』という硬い内容を想像していましたが、ミニワークで同じテーブルの人と夢をシェアできたことがとても楽しく、改めて自分の原点を見つめ直した気がしました」

「希望する会社から内定をもらい、就職を目前にした今、将来については『働くこと』にしか目がいかなくなっていました。家族や環境など、ほかの大切なことにも目が向くようになりました。気づくだけでは足りなくて、それを行動に起こす、0を1にする『起』のアクションをぜひ起こしたい」

若い力で 地域の課題に取り組む

2008.09.25 (木) 開講

【講師プロフィール】



広石拓司

(ひろいし たくじ)

株式会社エンパブリック
代表取締役、NPO法人
ETIC. シニア・フェロー
三和総研を経て2001年より
NPO法人ETIC.に参画。「
チャレンジ・コミュニティ
創成プロジェクト」など、
地域を活性化する社会
起業家の育成に取り組む。
2008年5月、株式会社
エンパブリックを設立。社会
活動を充実させる資源発
掘、人材育成、仕組みづく
り、運営支援をトータルに
サポートし、市民社会のバ
リヤー・チェーン構築に挑
戦中。

今日は、社会起業家と言われる人たちが、どういうふうに関心や事業を見ているのかということ、皆さんと一緒に考えていけたらと思う。ETIC.という団体で、社会起業家の支援や、地方都市でのインターンシップのコーディネーターの育成をする中で、いろいろな地方都市でチャレンジしている若い人たちを見てきた。彼らがなぜ地方を選んだのか、何を大切だと考えているのか、皆さん自身が新しいプロジェクトを立ち上げたり、新しい活動に参加していくときの参考になりそうな話を紹介したい。

●社会起業家とは？

「社会起業家ってそういうものか」と実感したのは、アンドリュー・モーソンさんという人の話を知ったときだった。モーソンさんは、イギリス・ロンドンのブロムリ・バイ・ボウという地区の牧師で、彼が赴任した1980年ごろ、そこは極貧の疎外されたスラム街だった。

その地区で1993年、35歳のジーン・バエルズさんという女性がガンで亡くなった。以前から明らかに体調が悪いことを、周りの人も本人も知っていたが、2人の幼い子供を抱えるシングルマザーである彼女は、仕事を辞められなかった。ついに倒れて病院に運ばれて亡くなったのだが、そこでのケアもひどいものだった。

「ガーディアン」紙の記者が、たまたまこの話を取材して、イギリスは、以前は「揺りかごから墓場まで」といわれる、福祉が整っている国のはずなのに、こういうひどい状況があるとコラムに書き、話題になった。

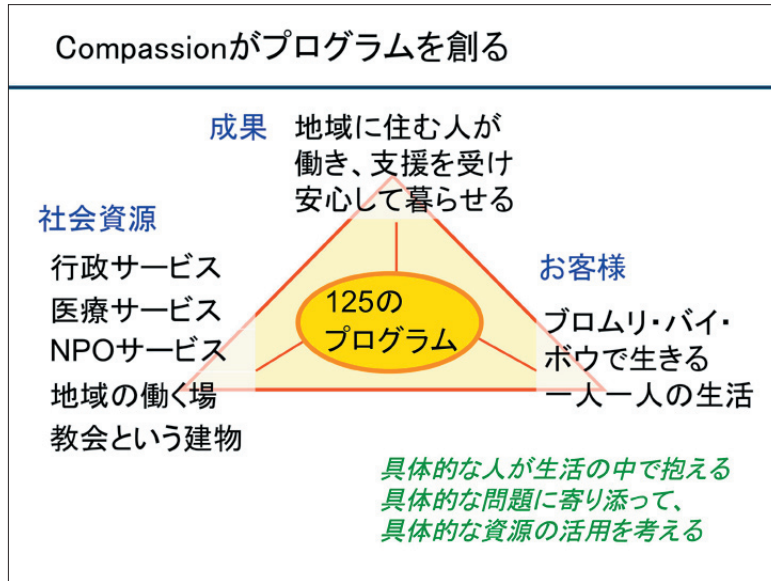
そこで地区の行政やチャリティー団体の関係者が集まって、なぜこういうことが起きたのか話し始めた。すると、一人ひとりには、ジーンさんを何とか助けたいという思いがあったことが分かった。何かしらしてあげていたことも分かった。「彼女には生活保護が必要だと思って書類をあげた。それなのに行政は動かなかった」、「無料の医療を受けるための書類が上がってきたけど、サインが足りなかったから、『ここにサインしてね』と送り返した」など、自分はやることをやったのに、ほかの人が動いてくれなかった、という議論になっていった。

この話を聞いていたモーソンさんはハッとしました。「実は、ここにいる人たち全員、誰もジーンの友達じゃなかったんじゃないか」と。例えば、自分の娘が生活保護を申請して、1週間たっても何も返事がなければ問い合わせるだろう。サインが足りなければ、「ここにサインしてよ」と書類を持っていくこともできたはずだ。自分の業務範囲を超えてまでフォローし続けたり、踏み込んだりする人が誰もいなかったのだ。

イギリスには福祉やチャリティーの制度がないわけではない。ただし、「その人のために動こう」という、おせっかいな部分が抜けているのではないかとモーソンさんは考えた。そこで彼は、地域に住む人のための場所をつくらせよう、「あなたは何に困っていますか?」「あなたは何ができますか?」と、住民全員に聞いて回った。

例えば「保育園では朝9時から夕方5時までしか預かってくれない。でも私はパブで働いているから、むしろ夕方から明け方の3時ぐらいまで預かってほしい」という人がいる。一方で、「私は病気のお母さんがいるから、日中の仕事はできない。夜に家で

きる仕事を探している」という人がいれば、もしかしたら、夜中に働く人の子供を預かってあげられるかもしれない。



そうやって、地域の人たちが困っていることと、提供できることを丁寧に結び付ければ、地域に少しずつお金が回る仕組みができることを、モーソンさんは発見したわけだ。10年ぐらいたった今では、125人の雇用が生まれるほどのサービスに発展した。

●眠っていた資源を掘り起こす

今度は日本の例を見てみよう。

「生活バスよっかいち」という、三重県でコミュニティバスを運営しているNPOがある。ほとんどのコミュニティバスが行政の全面的な支援で動いているのに対し、ここは自力で運営している珍しい例だ。もともと三重交通という民間企業がバスを走らせていたのだが、採算が合わずに止めてしまった。それをバス運営の素人が再生できたのはなぜだろうか。

このNPOでは、「誰もバスなんて使わないよ」という言葉にひっかかって、徹底的にアンケートを取り始めた。すると、バスに乗りたい人はいた。郊外都市だから、自動車を運転しない独り暮らしの高齢者にはバスが必要なことが分かった。そこで、とにかくお客さんが乗りたい場所と行きたい場所をつなごうと考えて、独り暮らしの高齢者の住まいを徹底的にマッピングし、スーパーや病院、パン屋さんや社会保険病院とか、高齢者がよく行くところを結んで、それまでとはまったく違う路線図ができあがった。

お年寄りの人が病院に行く目的の半分は、待合室でのおしゃべりだ。でも、当然ながら違う病院に通っている人とは話す機会がなかった。ところがこのバスに乗ると、ほかの病院に通っている人とも会話が生まれ、楽しくなってくる。今ではバスの中にカラオケまで付いていて、単なる移動手段を超えて、独り暮らしの人同士が一緒に過ごす時間を大切にできる場所になっていった。

そうは言っても、一人100円程度の運賃では、なかなか採算は取れない。スポンサーが必要だ。以前は、病院にもパン屋さんにも、「うちにはバスに乗って来る人はいませんから」と、断られていたという。ところが新しい路線になり、店のまん前にバスが停まると、そこで降りたお年寄りが店に来る。「あなたのお店に来るのにバスが必要な人がいるのです」と、NPOの人たちは説得していった。

単に「地域活性化だから」では、多分誰もスポンサーにはなってくれなかつただろう。

このバスが必要だということが具体的に分かって初めて協力しようという気になる。そうやって、スポンサーが集まり始めて、このバスは運営ができるようになったわけだ。

行政や一般的なビジネスでは、誰にでも便利なサービスを、と平均点を取ろうとしがちだ。でも、そのサービスを本当に必要としている人は誰か、徹底的にこだわるとニッチ市場が見えてくる。具体的に成果が見えれば、スポンサーも増えてくる。

世の中にはさまざまな社会支援や、応援してもいいという人たちがいるのに、具体的な人の顔が見えないとニーズと結び付けられない。一人ひとりの姿を見せることによって、使われていなかった資源が有効に活用され始める。そういうことがとても大切で、先ほどのモーションさんの話と共通する部分だ。

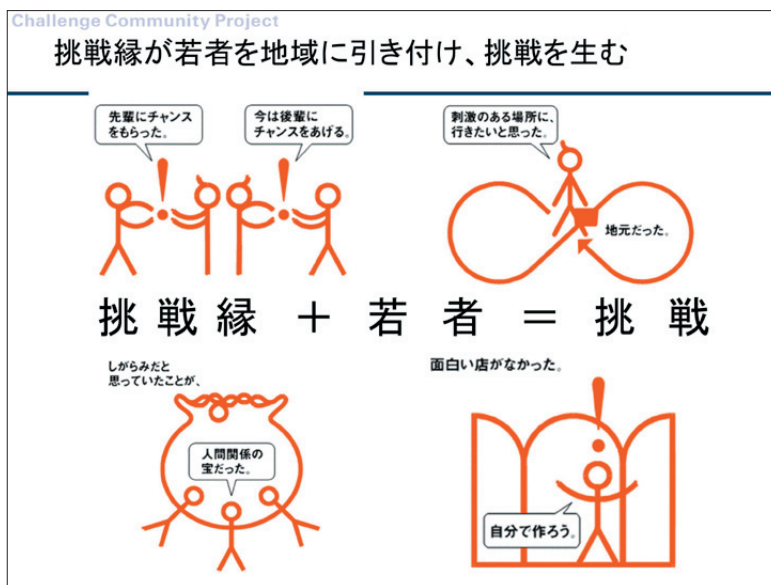
●「挑戦縁」が結ぶ、地域と若者の出会い

徳島県上勝町というところに「ゼロ・ウェイスト」という取り組みがある。山村の上勝町からごみを出そうと思ったら、海のほうの焼却場まで運ばないといけないため、相当なコストがかかる。そこで、「この地域からはごみを出しません」と、ゼロ・ウェイスト宣言をした。

そう決めたはいいが誰がやるのか、というときに、松岡さんという若い女性が現れた。彼女は、環境問題を北欧の大学院で研究して帰国したが、日本では学んだことを実践できる場所がなさそうだと困っていたところに、上勝町の話を知り、ビジョンに共感して飛び込んでいった。今は「ゼロ・ウェイスト・アカデミー」の事務局長を務めている。

「うちの町でも若い人手が欲しい」という農村や地方都市の声をよく聞くが、そこに入っていく若い人は、必ずしも地域を助けるために行くわけではない。むしろ自分自身の夢や目標があって、その舞台を提供してくれる場所に飛び込んで行ったわけだ。それを僕は「挑戦縁」と呼んでいる。

例えば、「自分自身も先輩にチャンスをもたらせてきたから次は誰かを助けたい」とか、「チャレンジしたい人がいるなら、うちの店でやってもらってもいいよ」という人はいるのだが、どこにいるのかは分からない。そこで、こういったつながりをつくるために、ETIC.では「チャレンジ・コミュニティ・プロジェクト」を始めた。



農村や地方都市も、丁寧に見ていくと、新しいことをやりたい人や、新しい事業を生み出したい人たちは大勢いる。なかには、若い人のパワーとか情熱とか、プログラミングなど若い人が得意なスキルが必要な人もいるかもしれない。そういう人同士が出会い、

一緒に働ける機会をつくるのは、地域にとっても若い人にとっても意味があるだろうと思って取り組んでいる。

●新しい一歩を踏み出すために

これから皆さんがいろいろな取り組みをするために、ぜひ知ってもらいたいと思うことをお伝えしたい。

新しい何かに動き出すために、まず「こういうふうになりたい」というもの、つまり自分のテーマを見つけてほしい。「本当にやりたいことが見つからなくて、動けません」と言う人が多いが、本当の正解は、動いて初めて見えることがある。大切なのは、仮でもいいから「これが自分のテーマかな」と思うことを考えて、それに向けてアクションを起こしてみることに。ダメだったら変えていけばいい。

海外では、社会起業家の役割の1つに「address the problem」があると言われる。問題は、誰かが問題だと言ったときに、初めて問題として認識されることがあるものだ。

例えば、「フローレンス」という病児保育に取り組むNPOがある。子供が病気になると保育園で預かってもらえないことが多いが、その日、お母さんは勤務先で大事なプレゼンがあるのかもしれない。以前は「仕方がないよね」と見過ごされていたが、フローレンス代表理事の駒崎さんという人が「それは問題なんだ」と言い始めた。「子供が病気になったからといって、仕事のチャンスを逃す社会はおかしいんじゃないか」と指摘し始めたのだ。こうして病児保育の問題があることに多くの人が気づき始めた。

世の中には「あれ？」と思うことがまだまだある。そういうことを、ぜひ友達と話してみしてほしい。意外に同じように感じている人がいたり、背景にある問題について議論が始まるかもしれない。誰かが言い出さないと、社会の中にある問題は問題にならないということを、ぜひ覚えておいてほしい。

人の中にある知恵やアイデア、経験は、そのままでは他人には使えない。いいアイデアを持っていても、表に出さないと使えないままだ。皆さんの中にもある、いろいろな思いや経験を、いろいろな場でほかの人に伝えてほしい。一人ひとりにすごい知恵や経験があるのに、自分の中だけに閉じ込めて、冷めた感じで見ていることが多くないだろうか。それを少しずつ持ち寄ることができれば、きっと社会は変わるだろうと思っている。

人の知恵や経験からいいものを見つけ出して、ほかの人に使いやすい形に加工し広めていく。そういう仕組みをつくろうと、私はエンパブリック (empubliC) という会社を立ち上げた。皆さんにも、できることがいくらかでもあるはずだ。

◆ 私が考える「サステナブルな社会」

世の中には、さまざまな社会支援や、応援してもいいという人たちがいるのに、それを必要としている人の具体的な顔が見えないとニーズと結び付けられません。地域の人たちが困っていることと、提供できることを丁寧に結び付けると、少しずつお金が回る仕組みができたり、使われていなかった資源が有効に活用される社会が生まれます。

◆ 次世代へのメッセージ

新しい何かに動きだすために、「こういうふうになりたい」という自分のテーマを見つけてください。「本当にやりたいこと」は、動いて初めて見えてきます。仮でもいいから「これが自分のテーマかな」と思うことを考えて、それに向けてアクションを起こしてみることを。ダメだったら変えていけばいい。

◆ 受講生の講義レポートから

「社会起業家とは、自分の持てる力と社会資源をつなげて、社会問題を解決するために働くコーディネーターなのだ気づきました。今までは、自分の力だけで解決するものだと思っていたので、考えが変わってよかったです」

「最初から正解は見つからないと頭では分かっていたけど、少ししか行動できてないなあ、と反省する気持ちがあふれてきて切なくなりました。バネにしてがんばります」

「NPOは、困っている人を助けるために何かをしよう、というプロセスで生まれる活動だと思っていましたが、夢を追ったら人の役に立った、という流れが成功のカギだと分かりました」

「就職活動中は、働く目的を自己実現を中心に考えていましたが、別の角度から光を当てることができ、自分がした職業選択の意味をもう一度考えるきっかけになりました」

